考えていると思っていること、知っていると思っていること。すべて、忘れよう。

フランシス・シュー
監督作品

帰り道

秘密は持たない。誰の機嫌も取らない。

THE FOUNDATION FOR THE AWAKENING MIND 提供「帰り道」フランシス・シュー 監督作品
撮影監督 アカシオ・デ・アルメイダ 編集 フランシス・シュー ソーレン・リンシュコン ピーター・カーク
製作 ジェフリー・コスカー ジェイソン・ウォーリック フランシス・シュー 監督 フランシス・シュー
www.TAKEMEHOMEMOVIE.net © 2019 THE FOUNDATION FOR THE AWAKENING MIND

ログライン

ユタ州の山々に囲まれたモナステリーに、見知らぬ者同士が一ヶ月滞在するために集まった。彼らはすぐに、今まで思っても見なかったほどお互いに対して大きく心が開かれるのを感じる。そうすることの中で、彼らは思いもよらない大切なものを発見する。

あらすじ

見知らぬ者同士が、現代のモナステリーに集まった。一ヶ月に渡るリトリート、タブラ・ラサ神秘学校に参加するためである。

このモナステリーには、たった二つのガイドラインがある。秘密は持たない、そして、誰の機嫌もとらない。ここへ来た全員が、このガイドラインに沿って生活することを示された。そして、お互いに正直になり相手を信頼することに心を開く機会が与えられた。

新たに訪れた者の中には、ミステリー・スクールを撮影するために来た撮影クルーもいた。撮影クルーが「直感的」に撮影する方法を取り入れようとすると、彼の意識に強烈な感情が上る。その頃、キッチンで働くボランティアは、エゴのプライド、嫉妬、そしてアイデンティティーが解体される真っ只中にいた。カメラは、彼らが体験した心の奥底からの癒しの過程をとらえた。

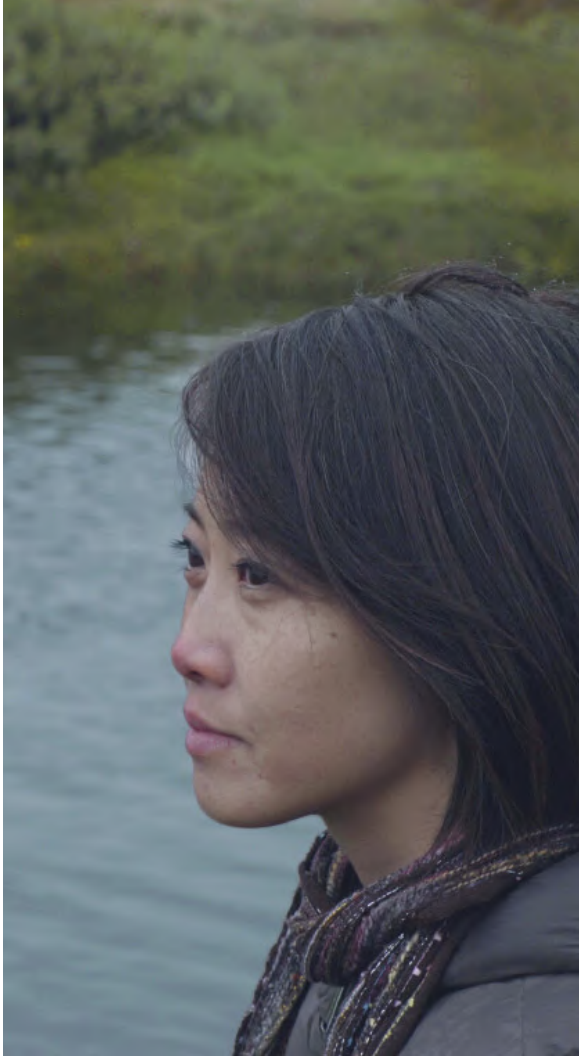
登場時人物が困難な感情に直面した時の抑圧や逃避から自由になると、映画「帰り道」はあなたを旅に連れ出す――それは、歌であり、愛の経験であり、覚醒の計画の完璧さを目撃することだ。すべての祈りは応えられ、すべての涙は拭い去られる。そしてすべての出会いは運命だ。

監督からのメッセージ

覚醒の旅についてのドキュメンタリー映画を作るアイディアは、私が2011年に見た夢から始まりました。当時、現代のモナステリーに入った私の人生は、大きく方向転換していました。今まで送っていた人生から完全に退き、私は論理や理屈を超えた力に導かれる事を学び始めたばかりでした。モナステリーでは日々の務めやプロジェクトは、「直感的」な内なる声を聞き、真実やこの世界を超えた力との繋がりを開発するためだけに使われました。私にとって映画「帰り道」は、それと同じ意図で作られたものです。

2017年、映画の制作クルー達が、一連のシンクロニシティを通して集まりました。チームのメンバー全員が、同じ目的を共有していました。それは、このプロジェクトを癒しのために使うこと。共有されたこの目的は、難しい状況に直面したとき、お互いを避けるよりも、愛と赦しを見つけるためお互いへ歩みよる方向へ、私たちを向かわせてくれました。全員がこの目的を最優先に掲げていなければ、私はチームを率いてこの映画を制作することは出来なかったでしょう。

どんな「物語」を語ることになるのか、私にはさっぱり分かりませんでした。私が祈りを通して受け取った「内なる促し」だけに基づいて監督するということに、私たちは初めから同意していました。その時々で下される直感的な決断が、自然と引出される心からの表現や超越体験を撮影させてくれたのです。



時が経つにつれ、主要な登場人物が明らかになりました。恋人、家族、チームメンバー、さまざまな人間関係が私たちの目の前で展開して行きました。彼らの物語が一見違って見えても、そこにある学びは同じです——手放すこと、開かれた赦しの心と共に、未知に足を踏み入れること。

人間関係は本来、私たちの愛する能力を広げるために使われるというテーマが、私は好きです。登場人物の全員が、古い役割やアイデンティティーから脱却する変わり目にいました。彼らは「仮面」を取り去り、彼らの最も無防備な愛への呼び声を、心を開いて表現することを学びました。そして、彼らが足りないと知覚した愛を与えることの中にこそ、癒しがあることを発見したのです。

沢山の映画の場面に、私は理由も分からず心動かされました。編集作業の過程で、私は何よりもまず「体験」を伝え、他は全て後回しにするように導かれました。登場人物の人生で起こった、強烈な瞬間の数々に、あなたも心揺さぶられ、癒されることを願っています。

登場人物

全ての登場人物と映画の場面は、認識することが出来る自分のマインドの動きが反映されている。個別の登場人物が個々の旅路を歩んでいるわけではない。彼らは癒されつつある一つのマインドの側面である。この映画は個別の人ではなく、一つのマインドがエゴを手放す旅をして、真実と愛に心開かれる様を描いている。

登場人物の背景にある話や、葛藤、またその人が経験しているドラマは、この映画の焦点ではない。彼らの問題は特別珍しいものではない。全ての問題は、究極的には同じである。本当に大切なのは、解決法だ。そして、解決法こそがこの映画制作のインスピレーションである。

ジェフリーとスザンナは二人の関係の中で、自分自身とお互いに対し、どのようにして忠実であるかを学んでいる最中だった。お互いへの期待が外れると、強烈な感情が上がってくる。その時、彼らは恐れから逃げ出さないという新しい体験に心開かれた。お互いを責め、自分のマインドの中で起こっていることを隠すよりも、彼らはそこに留まり一緒に痛みに向き合った。向き合った先に何が待っているのかは分からない。しかし、彼らは本音でコミュニケーションすることで、助け合うことを選んだ。湧き上がる痛々しい思いや感情に向き合い、癒す決心と共に。

ソーレンは、10年以上に渡り孤立した生活を送っていた。自分の怒りと羞恥だけが、彼が気づいていた全てだった。そして彼は正直に話すことに対し、大きな恐れを抱いていた。「私的」な考えを話す人々と一緒にいることは、危険だと感じた。過去が繰り返しそうな気配がした。けれど、彼が最も優しい感情を吐き出すことを選んだ時、古い憎しみは一瞬にして溶けてなくなることが、明らかになる。

フランシス・ロメオは、キッチンで重大な自己解体を経験していた。「良い料理人」という価値のあるアイデンティティーが崩れ始めると、彼女は途方に暮れた。エゴのプライドは、隠れ逃げだせと彼女に指示を出す。この古い自己概念がなければ、愛されない。そして愛される資格もないと彼女を説得しようとする。彼女は謙虚さと強さを見い出し、これらの信念を置いて、未知へと一歩踏み出せるのだろうか？

マーハ、**ニコリーン**、そして**スザンナ**は、ずっと仲の良い家族だった。一人一人、別々に覚醒への道を辿っていたが、偶然にも彼らは同じ神秘学校に申し込む。皆で再会した時、彼らは気づき始める。今までの役割を演じることは出来ない。もう昔のような関係には戻れない。お互いを手放し、真実の中で一緒になる時が来ていた。そして、失うものは何もないことを知るのだ。

映画製作者について

フランシス・シュー（監督/プロデューサー）：
フランシス・シューは、映画「帰り道」で監督デビューする。

ジェフリー・コスカー（プロデューサー）：
ジェフリー・コスカーはシャドウ・フィルムズというインディペンデント映画会社の創設者の一人である。映画「帰り道」は、The Foundation for the Awakening Mindの一員としての初めての製作である。

ジェイソン・ウォーリック（プロデューサー）：
ジェイソン・ウォーリックは、覚醒の道に関する映画に情熱を注いでいるフィルム編集者である。

アカシオ・デ・アルメイダ（撮影監督）：
アカシオ・デ・アルメイダは、130以上の映画に撮影監督として携わった。彼は、マノエル・ド・オリヴェイラ、ラウル・ルイス、アラン・タネール、他多数の監督と共に制作した。数々の撮影監督賞を受賞している。

ソーレン・リンシュコン（音響）：
ソーレン・リンシュコンは、デンマークのテレビ業界出身のインディペンデント映画制作者である。30年以上に渡り、動画編集者、プロデューサーとして活躍している。

テクニカルインフォメーション

題名：	帰り道
製作会社：	Foundation for the Awakening Mind
ランタイム：	79 分
製作国：	アメリカ合衆国
言語：	英語
制作年：	2020
字幕：	中国語（簡体字・繁体字）、デンマーク語、オランダ語、英語、ペルシャ語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、日本語、ポーランド語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、スウェーデン語
連絡先：	電話　+1 435-535-1770 contact@takemehomemovie.net